

令和4年12月15日

砺波医師会誌

杏和だより

第217号

◇◇◇ 目 次 ◇◇◇

〔時 評〕	・安倍晋三元首相銃撃事件を顧みて	藤井 正則	2
〔追 悼〕	・タエタマ解散となりました ～故 山本環先生を偲んで～ …	大田 妙子	3
〔人命救助〕	・「自然をあなどるなかれ！ 海難救助の経験」	太田 尚宏	4
〔活動報告〕			5
〔散 居 村〕	・円筒分水槽が“美しい”といわれる背景には	山本 郁夫	7
	・雑感4	湯浅 雅志	8
	・Google earth で疑似旅行	若栗 良	9
	・女 張飛	浅山 邦夫	10
	・おめでとうと言われました。	網谷 茂樹	11
	・生きているだけで丸儲け	家接 健一	12
	・『油断』	五十嵐保史	13
	・雑感 ～孫たちとの日々～	伊東正太郎	14
	・唐松岳登山2022	稲邑 克久	15
	・肩書きが無くなりました	井上久美子	16
〔新入会員紹介〕		桐沢医院 小清水由紀子	17
〔編集後記〕		豊田 葉子	18

発行所 砺波市幸町6番4号

公益社団法人 砺波医師会

発行人 砺波医師会長 藤井 正 則

安倍晋三元首相銃撃事件を顧みて

砺波医師会

会長 藤 井 正 則

55年前の吉田茂元首相の国葬儀の際には、国民全員が喪に服したと記憶しています。一般国民はサイレンの合図の元、その場で立ち止まり1分間の黙禱をせよという案内が事前がありました。その当時、自分はまだ小学4年生でしたが、地場の産業博覧会々場に出展していた陸上自衛隊の戦車の砲塔上で黙禱した事を鮮明に記憶しています。そして今回の安倍晋三元首相の国葬儀は、NHKの生中継を見ていました。流石に日本武道館です。外の喧騒は一切聴こえてきません。厳粛に国葬儀が執り行われました。エリザベス女王陛下の国葬儀と比べたら、遥かに地味な国葬儀でしたが、インドのモディ首相の心のこもった合掌しての一礼の作法が、安倍晋三元首相の人柄を偲ばせ、遠いところお参り頂きありがとうございますと心の中で呟きました。

この国葬儀は終わりましたが、国葬儀のあり方について世論を巻き込んだ議論が高まっています。憲政史上最長の在任記録を持ち、且つ首相退任後も自民党最大派閥の領袖だった政界の中心人物が、特定の宗教団体を巡り一方的に殺意を抱いた男から銃撃され、無念の死を遂げた事件は、計り知れない衝撃として瞬く間に世界を駆け巡りました。まだ安倍晋三元首相の死を実感できてはいませんが、我が国では戦前には6人もの現職首相や首相経験者が凶弾に倒れている事実を見過ごす訳にはいきません。今現在、長引くコロナ禍とウクライナ情勢の影響で社会は閉塞感が漂い、更に原油価格上昇、円安ドル高により厳しい経済状況に追い込まれています。そして我々医療界も体力が徐々にそぎ落とされています。刻一刻と変わる社会状況を鑑み迅速に対応するためにも、今一度戦前の近現代史を通じて歴史の流れを読み解き、且つ成功と失敗の歴史に触れる事により、何かの気づきがあればと思う今日この頃です。



タエタマ解散となりました ～故 山本 環先生を偲んで～

市立砺波総合病院 眼科

大 田 妙 子

令和4年5月21日未明、彼女は旅立ちました。享年60歳。五月晴れの爽やかな朝でした。筋萎縮性側索硬化症と診断されて1年でした。診断されてからずっと細部に渡り、サポートしてくれた小杉郁子先生と一緒に彼女を迎えに行きました。霊安室の彼女は鼻筋のすっと通った美しい顔で横たわっていました。一緒に旅するたび、なんと寝顔のきれいな人だろうと思っていましたが、本当に眠っているようで頬を触ってその冷たさでようやく涙がこみ上げました。

私と彼女は同い年で、大学は彼女が一学年下です。平成3年に私が、2年後に彼女が赴任してきました。それから多くの時間を共に過ごしました。スペイン、ドイツ、バリ島、香港、アンコールワット、ボルブドゥール、上海、北京、ハルビン、台湾…国内旅行に至っては数えきれません。仕事帰りに近くのお店にもよく行きました。そのうち『タエタマ』とセットで呼ばれるようになったね。飲みだすときつぶがよくて、笑顔がかわいくて、みんな釣られてへべれけになってしまうのがタマ会。4年前に最愛のお母さまが急逝されてからは時々寂し気だったけど、彼女のまわりには家族同様の仲間で作った“たまき組”、砺波に赴任した耳鼻科の先生による“たまき会”はじめ多くの会があり、いつも賑やかでした。2020年春以降、パンデミックにより会食は禁止、不要不急の手術はできなくなりました。鼻の手術を得意とする彼女にとってはもどかしい日々だったと思います。愚痴はいわない人でしたが、若い先生に手術をさせてあげられないと泣くようになりました。最初はコロナ鬱かと思いましたが、そのうち右手に少し力が入らないと言うようになりALSと診断されました。今後想定される経過を説明されたとき、少し困った顔をして『すみません…』とちょこんと頭を下げたそうです。気管切開などの処置は一切希望しないとのことで、1年足らずで最期の時を迎えることとなりました。

彼女がいなくなって5か月が経ちますが、まだ実感がわきません。コロナもやや下火となり普通の生活が戻りつつあります。なのにタマがいらない…。お互い還暦を迎え、またいろんなところに行きたかったけど、タエタマ解散と相成りました。きつとどこかでお母さんや新しい仲間とわいわいやってるよね?…と思うことにしています。タマちゃん、29年間、楽しい時間をありがとう。

「自然をあなどるなかれ！ 海難救助の経験」

市立砺波総合病院 大腸・肛門外科

太田 尚 宏

低体温症とは、深部体温が35度を下回る状態を指します。

低体温症を発症すると、さまざまな臓器が正常にはたらかなくなり、意識を失ったり不整脈を生じたりすることで命にかかわることも懸念される状態です。

私は、休日には、ウインドサーフィンを楽しんでおります。ある日、海難事故に遭遇しましたので報告します。

6月の昼過ぎ、その日は外気温は30度を超える暑さでしたが、水温は低く海水浴には適さない状態でした。休憩のため浜に上がると、海上に漂流するウインドサーファーがいることが判明。沖に向かう風が秒速7－8mで吹いており、自分の道具では二重遭難の可能性がある判断し、海上保安庁に連絡しました。その時点で出艇場所から浜沿いに500m、沖合に500m程度流されていると推測され、さらに風下に流されているように見えました。

海上保安庁到着までには20分から60分といわれ、すでに目視は困難で、このまま流されれば搜索範囲はかなり広範囲になると予測。監視目的に、となりの浜まで車で移動しました。しかしながらすでに波も高くなっており、浜からは完全に見失う状態でした。幸い、マリジェットの方がおられ、声をかけたところ、快く協力を申し出ただけでした。二人でマリジェットで搜索に向かいましたが、搜索は極めて困難をきわめ20－30分ほど搜索し、あきらめかけたところ、沖合約1kmほどにそれらしき影を認めました。近づいてみると、すでにボードにしがみつ়く力はなく、わずかに引っかかっている状態でした。泳いで近づき、ジェットまで引っ張てきましたが、自力で登る力はなく、操縦者は常に操縦し続けなければいけないため、十分な介助はできない状態でした。最終的に私が潜って肩に担ぎ、這い上がるという方法でなんとかマリジェット上に引き上げることができ、なんとか救出することができました。

すでに意識は朦朧としており、発語なく、震えもなかったことから、低体温症であったと思われます。幸いにして、病院搬送後は経過良好だったとのことでした。

今回は救出することができて非常に幸運でした。自分も常に安全には留意しようと改めて思わせる経験でした。

活動報告

(令和4年7月～令和4年11月まで)

令和4年7月

- 1日 胃内視鏡読影委員会
- 7日 2022 地域医療連携懇話会
- 11日 第4回理事会
- 12日 富山県医師国民健康保険組合第155回臨時組合会
- 21日 砺波地区病診連携がん診療連携カンファレンス
- 26日 学術講演会
「ダーブロック錠をいかに使いこなすか！」
春日井市民病院 院長 成瀬 友彦
- 29日 胃内視鏡読影委員会

令和4年8月

- 8日 第5回理事会
在宅医療支援センター運営委員会
- 18日 2022 年度介護保険一主治医研修会
- 31日 胃内視鏡読影委員

令和4年9月

- 12日 第6回理事会
- 15日 砺波地区病診連携がん診療連携カンファレンス
- 21日 在宅医療支援講座
- 22日 在宅医療介護支援巡回講座
- 24日 在宅医療・本人の意思決定支援講座
- 26日 令和4年度第2回広報委員会
- 27日 学術講演会
「炎症性腸疾患～診断・治療のピットフォール～」
市立砺波総合病院 消化器内科 主任部長 北村 和哉
「逆流性食道炎治療の最適化～新しいガイドラインを踏まえて～」
富山市民病院 内視鏡内科部長 水野 秀城

- 28日 胃内視鏡読影委員
- 29日 在宅医療介護支援巡回講座
- 30日 在宅医療介護支援巡回講座

令和4年10月

- 4日 在宅医療介護支援巡回講座
- 6日 第58回砺波准看護学院戴帽式
在宅医療支援講座
- 11日 第7回理事会
- 12日 令和4年度砺波救急医療・消防連携協議会大規模訓練
- 13日 在宅医療介護支援巡回講座
- 15日 在宅医療・本人の意思決定支援講座
- 16日 令和4年度富山県総合防災訓練
- 19日 社会保険医療担当者の新規個別指導
- 25日 学術講演会
「頭痛の鑑別について」
市立砺波総合病院 脳神経外科 医長 林 智秀
「片頭痛診療の新たな一手～片頭痛患者さんのトータルケアについて～」
立岡神経内科 院長 立岡 良久
- 26日 胃内視鏡読影委員
学術・生涯教育委員会（県医）

令和4年11月

- 11日 在宅医療介護支援巡回講座
- 14日 第8回理事会
- 17日 砺波地区病診連携がん診療連携カンファレンス
- 25日 令和4年度地域産業保健センター全体会議
- 29日 胃内視鏡読影委員会

円筒分水槽が“美しい”といわれる背景には

山本内科医院

山 本 郁 夫

最近も“日本一美しい”円筒分水槽とSNSでアップされた魚津市の東山円筒分水槽を訪れた。(県医報 2022 年 4 月 1 日号表紙写真、魚津市平野八州男先生撮影掲載。) 周囲田んぼの中に突然と現れている人工的なコンクリートの構造物。中央に溢れる湧水、それが四方に滔々と流れる様は確かに目を引き、蒸し暑い初夏には爽やかな気分でした。

円筒分水槽(工)は全国的にはそんなに多くはないようだが、富山県には5ヶ所あるという。その後折をみてみんな見て回った。魚津市片貝川水系貝田円筒分水槽、上市町上市川水系の釈泉寺円筒、南砺市赤祖父分水槽、氷見市鞍川分水槽です。それぞれ特徴のある分水槽だが東山分水槽、釈泉寺分水槽、赤祖父分水槽は国の登録有形文化財に登録されているという。そこで、それらはそれぞれの市町村が観光スポットとしてアピールしようとしている。実際、東山分水槽へ行ったときには市の職員が見学者の動向を調査していた。建造物が権威付けされたから単純に観光スポットとしてよいものなのか。分水槽の案内版には分水槽が造られた理由に水争いの解決のためと簡単にしるされている。

筆者の祖父は弁護士だった(昭和30年ごろまで)。現在のような派手な仕事柄ではなかったようで、事務所も自宅の座敷と書斎。祖父が亡くなってからその部屋に子供心で“探検”することがあった。そこにはたくさんの書類と書籍があり、さらにまた夥しい数の五万分地形図その他の地図があった。彼は旅行家でも登山家でもない。昔の訴訟・裁判案件は多く入会地権、水利権に関するものだったらしい。要するに水と土地の争いが主だった。たくさんあった地図はそういった調査・検証に必要だったのだろう。

農業用水の問題は深刻。灌がい、水路も十分発達しておらず、農業用水の安定供給にいたらないため、農業用水確保にまつわる紛争(水争い)は全国的に絶えず、流血事件に至ることもあったようだ。(河川が多く、水量が多く干ばつがない富山県でも) これらを解決するため、河川や用水の水利工学が発達し、農地への分水が改良された。さらに公平な用水の分配法がかんがえられている。近くに水量豊富な水系があり、農地周辺の地形の変化があっても、サイホンの原理を応用し湧水させる円筒分土工(槽)が最も安定、公平に分水できる工法とされている。円筒分水槽が“美しく”見えるのは永く醜い争いを解決した人間の知恵と工夫がそうみせている分もある。

雑感 4

ゆあさ眼科

湯 浅 雅 志

長年手術を行っていると、全く同一名の手術器具でも、その製造国によって、異なった特性があることに気づかされ面白い。某西欧製鑷子は、粗な水晶体表面に屈することなく、突き上げてくるようなシャープさで対応しようとする。じゃじゃ馬な操縦性だが、オンオフが明確で、限界が分かりやすい。他方、開閉が分からないくらいにしっとりとしたものもある。あくまでも面に抗うことなく、忠実に、しなやかに、優美に曲線を描いていく。術者にはそれらの特性を、経験から正確に理解し、体得し、協調していく責務がある。

コロナ禍では様々な人間（行動）特性が垣間見えた。デマや流言に惑わされる、ワクチンへの不信感、他方ワクチン接種を急ぐ余り他人を差し置き自己中心的な行動に走る、コロナ補助金不正受給、等々。これらは自己保身欲で説明が付くと思うが、理解に苦しむのがいわゆる「俺コロナ」。他人に自己を理解してもらえない“孤独”の要素が加わり、相乗的に働いたのであろうか。いわゆるリバタリアニズムではないが、その人々の、“特性”として、穏便の内に済むのは、他人の“特性”を認めつつ、協調しようとする時のみであろう。侵害的であっては決してならないのである。精神科クリニックを放火したり、隣国を侵攻したり、海を隔ててなりふり構わずミサイルを乱射したり、此畜生と患者を罵ったりしては、いけないのである。

さて、術者の努力虚しく、分かり合えなかった器具達はやがて、手術室を去り、お蔵入りとなってしまふ。なりふり構わず主張を繰り返し、他人（国）を認めず、協調できない連中は、21世紀、令和という新しい時代のステージから、永久に entlassen してもらいたいものである。



Google earth で疑似旅行

ものがたり診療所

若 栗 良

コロナ禍も早3年、そのうち行けると思っていた海外旅行には大学の卒業旅行以来行けず、先日パスポートの期限も切れてしまった。

そんなコロナ禍の影響をまともに受けた海外旅行のバイブル「地球の歩き方」は、一時売りが9割減まで低迷したそうだが、アニメとのコラボ企画や日本各地の特集編を刊行して売れ行き回復、うまく凌いでいるらしい。元来じっとしていられない性分の私も、この3年間は Google earth と共に画面の中を「旅行」してなんとかここまで凌いできた。

Google earth はご存知の方も多いかと思うが、端的に言えば衛星写真アプリである。地球レベルから一軒家レベルまで近づくことが可能で、「ここだ!」と思ったところにフォーカスして近づき、ストリートビュー（地面レベルの景色、ただし道路に限る）を楽しむことができ、街を実際に行く歩行者目線を体感して、しばし旅行気分を味える。ひとたび Google earth を開こうものなら、延々とポチポチ各地をクリックして周り、いつの間にか数時間経過していることもしばしばであった。さらにVRゴーグルを装着すれば、360度本当にその空間にいるように世界の名所を体験できる（ただしVR酔いに注意。私は10分で酔いました…）。

でもそんな疑似旅行を経て思うことはやはり、「あ〜やっぱり現地に行きたい」である。少しずつ色々な規制も緩和されてきた。まだまだマスクを外す勇気などとてもないが、旅行を存分に楽しめるまで、もう少し・・・だろうか。



廿 張飛

市立砺波総合病院OB

浅 山 邦 夫

三国志の蜀の武将、ひげ面の張飛はご存じでしょう。大酒のみで、最後は酒を飲んで眠ったところを恨みを持った部下に暗殺された豪傑です。その時代の映画やテレビ・ドラマでは、酒飲みの登場人物はご飯茶碗サイズの器に酒を注ぎ、グイグイと飲んでいる様子が出てきます。アルコール度数からいうと、現在の白酒（コウリャン、小麦、トウモロコシ、甘薯などを原料に中国各地で造られている無色透明な蒸留酒、アルコール度は55度～65度前後と高い）クラスの酒と思います。

私が生まれて初めて白酒を飲んだのは初回の訪中の時（1983年）でした。噂に聞いていましたから、そっと少しだけ飲み込んだのですが、自分の食道がどこを走っているのか分かるくらいの強い衝撃だったのを覚えています。それから何度も口にしてきましたが、小さな白酒用のグラスに控えめに注いだのを乾杯の音頭で口にするだけで、自分から手を出すことはありません。

その後、98年敦煌へ旅行した時、ゴビ砂漠を2泊3日で私たちのチャーターバスを走らせてくれた運転手さんが、夕食時に白酒をコップ酒で飲んでいるのを見て驚き、こんなご仁もいるのだと知り、彼に“白酒大王”とあだ名を付けました。

時代は下り、2016年5月、ハルピンでの生活が始まって間もなく、リハビリ科の商主任と事務所の皆さんが勤務日の昼食にダック店でご馳走してくださいました。昼食なのにビールも白酒も出て、宴会状態です。この席で私は初めて、女性もコップ酒で白酒をこなす人がいることを知りました。女性事務員（Guoさん、50歳ぐらいでしょうか）が決して無理をされているわけではないことは、私以外の同僚たちは驚く様子もないことから分かります。私も勧められ、客として、男として断るわけにはいかず白酒のコップ酒を初めてやる羽目に……。

病院に戻って、自分の机で夕方まで寝てしまいました。イヤァ、中国は恐ろしい国だ。



おめでとうと言われました。

あみたに医院

網谷 茂 樹

10月の下旬の日曜日用事があつてクリニックに出勤すると、隣りに住んでいるおばさんが駆け寄ってきて『先生おめでとう。すごいね、立派や』といきなり褒めてくれました。

何があつたのかわからない私が、キョトンとしていると新聞に大きいのに出ていて良い写真だったと言うのです。

ここでやっと1ヶ月前に砺波市から功労賞を贈りますと言われて顔写真を撮った事を思い出しました。

コロナやインフルエンザワクチンで忙しい日々ですっかり私の頭からは抜けていました。

その後もおめでとうの嵐で近所のお兄さんからメールは来るし、週明けの診察でも新聞見たよとか、いい写真やったよとか皆さん喜んでくれました。果ては、夏野市長は良い仕事してくれたと市長さんを褒める人も現れました。

通院中の患者さんは、これほど私の事を気にしてくれて心配してくれているのかとびっくりしました。

これからも、私の通院している医院の先生は立派な先生だよと思ってもらえるよう精進したいと思います。

患者さんに元気をもらった功労賞受賞でした。



生きているだけで丸儲け

市立砺波総合病院 外科
家 接 健 一

先日テレビを見ていると、ある芸人さんが「生きているだけで丸儲け」と言っていました。いい言葉だと思いました。聞くところによると、明石家さんまの座右の銘でもあるらしく、大竹しのぶさんとの間の娘さん IMARU の名前はこれにちなんでつけられたらしいです。今年も、多くの著名人や長い付き合いだった友人や先輩も亡くなりました。おまけにウクライナでは、いまでも多くの方が命を落としています。今もこうして生きて仕事をしている私たちは幸せと思わなくてはならないでしょう。

杏和だよりには写真や絵の寄稿でも構わないとのこと。そこで、今回は61年間なんとかコロナ禍に生き続けている人間の顔を描いてみました。自画像です。パステル画です。下手くそですが、なんとなくいい感じにできました。



『油断』

あおい病院

五十嵐 保 史

コロナ感染が始まり、早3年が経過いたしました。手洗い、マスクも当たり前になりました。一日中マスクを着用しているため、車の中ではマスクをつけず運転しています。顔がずれて痒くなるからです。先日急な用事で車から降り移動しなければならない時がありました。やたら人の視線が痛いように感じ、どこか変かな？と自分の体を観察しましたが、どこも変じゃない。しばらく考えていると、口元が寒い、風が当たる感じがして……。マスクをせず歩いていたのです。“ガッデム、何とした事か？”とマスクを取りに車に急いで戻ることがありました。あー、何て事をしたのか？と思ってしまう位、マスク着用が日常生活になじんでしまった事に寂しさを感じました。コロナ禍でマスク着用してから気付いた事があります。それは、口元に締めりがなくなるとるみが出た事です。歳が歳だからしょうがないって意見がありますが無視しておきます。どうして分かったかという、たまたま証明写真をとる機会がありコロナ前、後で比較した際に分かりました。原因は“油断”です。きっと。いつもマスク着用時、人に見られていない為緊張感がなく、キュッと口を閉じていることが減っていました。また大声を出さなくなった事や表情を出さなくなった事も関係するかもしれません。だから最近は口元の動きを意図的に増やすようにしています。体も同じで“油断”で“コロコロ”です。締めりなんてあったものではありません。これは、私生活の乱れでしょうか？気を引き締めて、体を締め上げていくぞ！ “おう！”



雑感 ～孫たちとの日々～

市立砺波総合病院 医療顧問

伊 東 正太郎

砺波に赴任した 1989 年当時、脳外科は大橋先生と私の二人だけの体制でした。それこそ、365 日 24 時間体制で全ての患者さんを受け入れていましたので、現在の働き方改革とは真逆の世界でした。5 月の連休や年末年始には、周辺の医療機関から紹介患者が急増する傾向にありましたので、連続した休みの前日には「また、消耗戦が始まるのか・・・」と覚悟を決めていたものです。

この時、長女は 6 歳、次女は 2 歳でした。36 歳の私は、子どもたちが起きる前に出勤し、帰宅時には我が子の寝顔を覗き込むだけの毎日が続きました。脳外科二人体制では日曜日や休日であっても急患が入ると必ず緊急出動です。遊園地に行くために玄関先に出てきたところで「ポケットベル」が鳴り、娘たちを何度も泣かせたものです。

その私も、今は 69 歳となり、金沢在住の 6 歳と 3 歳の孫二人を家内と交代で孫守をしている毎日です。平日は夕方から孫たちが寝るまで一緒に過ごし、土曜日や日曜日の日中は卯辰山公園などで孫を追いかけて走り回っています。平日の孫守日は、孫たちが保育園から帰宅する時刻までに金沢に着かなければなりませんので「一時間休（有休）」をもらっています。平日は、二日ほど私が担当し、残りは家内が担当しています。

自分自身の娘たちが幼い時、どのような生活を送っていたかほとんど見ていなかったのですが、よく覚えていませんが、今、孫たちと密着して過ごしていると、家内や祖父母が親身になって接し、娘たちを大切に育ててくれたのだろうと感謝の念が湧き上がってきます。このように血の繋がった幼い孫たちと一緒にいると「目の中に入れても痛くない」という言葉が本当にスーッと腹に落ちます。

日々そんな感情に包まれていると、幼い子どもたちが命を落とす事件を見聞きする度に胸が締め付けられ押し潰されそうになります。津波で犠牲になった幾多の子どもたち、通園バスに取り残されて命を落とした保育園児、さらには、難民の幼児が波打ち際で息絶えてうつ伏せのまま波に洗われている姿など、これらのニュースや映像を思い出すだけで胸が張り裂けそうになります。また、貧困家庭の 4 歳児がフードパントリーでもらった「グミ」の小袋を一週間かけて少しずつ食べている姿は、すぐに自分の孫に投影してしまうので、いたたまれなくなってしまうのです。

今の為政者たちには、次世代を担うこれらの子どもたちが健やかに育つ社会を築いてくれるよう願って止みません。

唐松岳登山 2022

いなむら内科

稲 邑 克 久

令和4年7月コロナ第7波中でしたが山なら大丈夫かなと思って唐松岳に行ってきました。友人に朝5時に自宅に迎えにきてもらい白馬村に向かいます。7時ごろには白馬村につき現地のコンビニで買い出し、そこから八方尾根スキー場のゴンドラとリフトを乗り継ぎ八方池山荘（標高1830m）まで上がります。リフトの眼下には花々が広がり綺麗でした（花の名前は勉強中）。8時山荘出発、まずは八方池を目指します。1時間ほどで八方池に到着、ここまではハイキング感覚でることができます。家族で軽装の方もちらほら、しかしその日は生憎の曇り模様で人出は多くなかったです。生憎とは書きましたが気温は高く、これで直射日光だったらかなり辛かったかもしれません。雲に助けられ、また途中、雪溪の自然クーラーで体温調整しつつ、なまった体にむち打ちながらゆっくりと足を進めていきます。最後にはかなりへばりながら唐松岳頂上山荘に3時間半でなんとか到着しました（YAMAPだと標準ペースなのでまだまだいけますかね）。唐松岳頂上山荘はスタッフのコロナ感染により休業中でした。山荘経営も難しい世の中であるようです。冷やしておいたノンアルコールビールで乾杯しつつ昼休憩30分、ぱらつく雨と風のためバーナーが点火せずカップ麺はお預けでした。その後、唐松岳頂上（2696m）を目指し20分再度頑張り、頂上までことができました。（写真は唐松岳から見た頂上山荘です）

唐松岳は北アルプスの中ではリフトがあるため日帰り可能な大変登りやすい山となっています（地元の中学生の遠足？でよく利用されるほど）。高低差約1000m、距離10kmです。

帰りは驚くほど早く2時間ほどで八方山荘まで降りてきました。途中天気が崩れて背後で落雷の音が聞こえてきたため少しビビってスピードが上がったせいかもしれません。山荘で食べたブルーベリーソフトクリームが大変美味しかったです。ゴンドラおりて八方の湯に立ち寄り汗を流して帰りました。行き帰りの運転をしてくれた友人に感謝。

昨年は残念ながら行けなかったのですが1年に1座登れば良いなあと思っております。



肩書きが無くなりました

井上皮フ科医院

井 上 久美子

昨年の3月に日本皮膚科学科の専門医チームという所から（皮膚科専門医資格更新の確認についてご連絡）という知らせが届きました。（令和4年4月1日から専門医資格が喪失となります。御辞退される場合は御連絡ください）という文面です。私は（辞退いたします）と連絡しました。1988年に専門医資格を得てから34年余り、74歳の時まで日本皮膚科学会の専門医という肩書を持っていました。これが無くなりました。専門医資格は病院勤務では病院が（日本皮膚科学会認定医研修施設）として認定されるため必要ですが、開業医では無くても何も問題は無いようです。

私が専門医になった頃には講習会への出席、論文の誌面への掲載、学会発表の幾つかの数があれば専門医になれました。その後は難しくなってしまう、試験までである様子です。古い時代に専門医になった私は、学会出席の点数を集めるだけで6年、後には5年ごとに資格を更新してきました。さすがに今回はハードルが高くなっており更新できませんでした。感慨深いものがあります。講習会のためはるばる東京と和歌山の2か所に出かけた事などを懐かしく思い出しました。

最近の皮膚科診療の進歩を、文献、病院への患者様の紹介のご返事などで垣間見ますと、僅かながらにでもついていこうとするのもなかなか大変です。肩書きが無くなりましたが診療には何の関係もなく、私はもう少し皮膚科医として働きたいものと願っております。



新入会員紹介



桐沢医院

小清水 由紀子

令和4年10月から桐沢医院で内科医を務めております、小清水由紀子と申します。砺波市で生まれ、高校までは出町校区の自宅から徒歩圏内の学校に通っていました。高校卒業後は富山医科薬科大学に進学し、車で自宅から通学していました。

大学卒業後は、学生時代から内分泌に興味を持っていたことや、熱心な勧誘をいただいたことが決め手になり、出身大学の第一内科に入局しました。附属病院での研修、県内関連病院内科医師としての勤務、大学院での糖尿病基礎研究で学位取得ののちに、富山大学で診療、研究、研修医や学生の指導にあたっていました。

専門は違いますが、山下直宏先生が同門の先輩だったご縁で、大学のスタッフだった平成22年から7年の間、桐沢医院で週1回内科外来を担当していました。その際、一般内科の外来診療の貴重な経験を得ました。また、地元の地域の方たちとの会話を通じて心が安らぐひと時でもありました。出産後も実の両親の協力を得て仕事を続けていましたが、次第に育児も仕事も、自分で納得できない内容のものになっていき、ジレンマに苦しみました。そこで、仕事のほうは自分が一番力を注ぎたい外来診療に専念しようと考えました。

そのタイミングで金沢に新規開業した、浦田クリニックに入職しました。ジム、健診センターが併設され予防医学に力を入れている複合的な施設で、外来、健診・ドックなどを担当しました。5年半勤め、多くの患者様に通院していただけるようになりましたが、特にコロナ禍になってからは、やはり地元の砺波で医療に貢献したいという気持ちが強まっていました。そんな時に、以前からお世話になっている山下泉先生にその旨をご相談したところ、桐沢医院での内科開業をご快諾いただきまして、現在に至ります。

一人ひとりの患者様の声に耳を傾け、丁寧に診療にあたっていきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

砺波医師会誌 第217号

編集後記

コロナ関連の補助金不正受給のニュースを時々聞きます。最近では山代温泉の旅館「みやびの宿 加賀百万石」で雇用調整助成金の不正受給、伊勢市の旅館でも。経産省元キャリアまでもが持続化給付金の不正受給で実刑判決が下っています。こうした悪い奴らにメチャメチャ腹が立ちます。

厚労省に「令和2年度新型コロナウイルス感染症感染拡大防止・医療提供体制確保支援補助金」金25万円の申請を令和3年2月末に提出、同年10月8日付けで交付決定通知書が届き、何度か電話で問い合わせ、ようやく令和4年7月に入金されました。書類提出から1年5か月もかかりました。事務局の振込口座間違いという怪しい手違いもあったので苦情を言うと、なんとわたしのよう^{●●●}に交付が完了していない施設がまだ5,000件ほどあると。へえええ。もちろん、飲食店などの収入が大きく落ち込んだ事業所や個人には適切な素早^{●●●}い給付金の交付がされていたと信じています。厚労省も大変忙しいのでしょうが、各担当部署はうまく機能しているのでしょうか。これからまたコロナ感染の第8波が襲ってくるのが心配です。真面目に頑張りましょう。

豊田 葉子 記

(広報委員) 豊田 葉子、津田 博、山田 泰士

